



学習企画

第11回

「軍事国家への道を許さない」

戦争が始まっていない時から敵を想定するミサイル

さて、前号紹介した購入予定の「トマホーク」そして、配備や開発予定の「12式地对艦ミサイル能力向上型の配備と開発」「高速滑空弾の開発」「極超音速ミサイルの開発」には共通点があります。1点目は、飛ぶ距離が長いということです。飛行距離は1500km～2000kmとされていますが、この距離は、北朝鮮の弾道ミサイル「ノドン」とほぼ同じです。つまり名称は違いますが日本が大陸間弾道弾のようなものを配備しようとしているということです。

2点目の特徴は、「トマホーク」以外は少し複雑な飛行をとるということです。3点目の特徴は、レーダーなどに発見されないような工夫がされていることです。4点目は、事前の情報把握が決定的だという特徴を持っています。5点目は、いずれも高価なミサイルであるということです。ですので、これらの特徴を実際の運用場面に置き換えると戦争開始初期に使用＝専制攻撃用のものと見れます。

つまり、これらのミサイルを保有するということは、事前に仮想敵国および標的を設定しておくということになり相手国から見ると「私たちが標的にしている」ということとなりますので、「脅威」以外の何ものでもありません。



▲ASM-3ミサイル(出典:Wikipedia)

そもそもミサイル防衛構想は何を守るシステムなのか

さて、安保3文書の特徴の2つ目は、統合防空ミサイル防衛です。アメリカ軍と協力してミサイル防衛をすすめています。この構想は、どういうものかを軍事戦略の面から見てみます。この構想は、そもそも2002年12月17日ブッシュアメリカ大統領の発表から始まりました。この発表以降、アラスカ州の軍事基地が大きく強化されてきました。

ソビエト連邦の崩壊以降核戦争の危機は一瞬遠のきましたが、その後核保有国と弾道ミサイル保有国が増えてきました。現在核爆弾を保有しているのは、アメリカ・ロシア・中国・イギリス・フランス・インド・パキ

スタン・イラン・イスラエル・北朝鮮・サウジアラビアの11ヶ国です。その結果、核攻撃からアメリカ本土を守るための施策が必要になりレーガン大統領がSDI計画(通称スターウオーズ計画)を発表しました。この計画は、技術的な実現可能性が薄く頓挫しました。それを受けて、新たな構想である統合防空ミサイル防衛構想(IAMD構想)にたどり着いたわけです。

一旦戦争が開始されると、多くのミサイルや戦闘機・潜水艦が同時に攻撃に向かうようになるわけですが、それらすべてを防ぎきることは不可能なんです。ですから、少なくとも核攻撃からアメリカ本土を守るため

にはどうするのかという問題意識がこのシステムの出発点でした。そのためには、秒速7kmというとんでもない速度の核爆弾を搭載した大陸間弾道弾ミサイルを飛行中に撃墜することが必要になり、その技術としてミサイル迎撃ミサイルが開発されたわけです。

この統合防空ミサイル防衛構想ですが、大きく4つの部分から構成されています。①監視・早期警戒のシステム②ミサイルの類別と識別③ミサイルの探知と追尾④攻撃と攻撃評価です。そのために戦闘管理・指揮統制・通信情報の各システムの構築が必要になりました。

この4つをそれぞれ見ていきます。まず監視・早期警戒のシステムです。これに使用されるのは、軍事衛星による監視システムがあります。レーダーを使用する軍事衛星とカメラを使用する軍事衛星の2種類があります。次に地上設置型のレーダーがあり、海上にはイージス艦にレーダーが搭載されています。空には早期警戒機という軍用機にもレーダーが搭載されています。これらに附随してさまざまな情報収集システムがあります。このシステムでは、敵国のミサイル発射場所やそのミサイルの種別や動きを監視することになります。発射基地の場所の把握・潜水艦の場合は母港・爆撃機の場合は、飛行場の把握となります。次に、動きの把握です。潜水艦ならば、出港してどこに向かったのか？爆撃機ならば基地を飛び立ってどこに向かったのか？陸上発射型のミサイルの場合も列車や車で移動するタイプもありますから、移動先の把握があります。さらに、発射前に行われるであろうミサイルに搭載する発信器の電波テストや観測ヘリの無線交信あるいは沿岸警備の艦艇の出入りの動きや地上の警備部隊の活発化した動きなどを把握しておく動きになります。

次にミサイルの類別と識別です。ミサイルが発射された時には、どこから発射されたのか？そのミサイル



▲軍事衛星 (出典: Wikipedia)

の射程はどのくらいのものか？ミサイルはどこに向っているのか？を上記の監視システムと合せて赤外線を使用する軍事衛星やF-35戦闘機・現在開発中の無人偵察機で対応する必要があります。

そして、次の段階は、ミサイルの探知と追尾です。そして最後に攻撃と攻撃評価です。この攻撃に使用されるのが迎撃ミサイルですが、現在に至るまで実験段階でも半分程度の命中率となっており、このシステムが発表された当初から現在に至るまで、軍事専門家の間では懐疑的な意見も根強くあります。それは、高速で飛行するミサイルに本当に当てられるのか？という単純な疑問です。実は筆者もその懐疑派の一人です。実験というのは、何月何日何時何分にどこから発射され、気象条件はこうだという事前情報があり、単発のミサイルだということで余裕を持って対応できる状況にあります。そのような好条件でも半分の命中率ということは、戦争状態になればその命中率は限りなく低くなるということは想像に難くないところです。

このような状況の下でも「アメリカ本土は何としても守る」ということが目的ですから、そのためにはより確実な方法を選択するという結論になっても不思議はありません。(国吉)